

本年度の重点目標達成に向けた各分掌のテーマ及び具体的な取組

分 掌 名： 進路指導部

記入者氏名： 鈴木 亘

本年度の重点目標

人材育成と自己実現

すべての教育活動を通じて人材育成を図り、人格の完成と自己実現を支援する

*** 実践指針**

「追究姿勢」をすべての教育活動の根底に置くこと。これを通して、「先行き不透明な時代に挑戦し、自己と社会の未来を切り拓く人材（21世紀人材）の育成を図り、人格の完成と進路目標の達成を含めた自己実現を支援する

以下年度当初の教育方針の「具体的な手立て」に沿って、各分掌、学年でさらに具体的な方策を明記して作成してください。

月	各分掌のテーマ及び具体的取組の作成及び実践 Plan~Do
4 6 月	<p>(テーマ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 面談を通して生徒個々の意欲を喚起し、志望達成のための支援をする。 <p>(具体的取組)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 進路面談週間を通して個々の生徒の状況を的確に把握する。また、面接がスムーズに進むような体制を整える。 ○ 学力的な面での診断・支援を進めるために全学年主任、学級担任にベネッセコーポレーションの Fine System をインストールするとともに、運用に必要なベネッセハイスクールオンライン個人 ID の取得・更新を徹底する。その活用方法について教員個々の理解を深める。 ○ 教員一人ひとりの面談スキル向上のために、講演会などの研修の場を設ける。
	<p>各分掌の検証方法及び具体的取組の検証（1） Check</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校訪問での指導事項（ 月） ・管理職及び分掌主任会議による検証・改善等 <p>(検証結果)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 例年よりも数日面談週間を伸ばして実施をしたが、それでも全員の面談を終了することができていないクラスが多数みられた。 ○ 7月段階で学年主任、担任、進路指導部のほとんどの先生方が FINE SYSTEM をインストール済みであった。特に3年部の担任は迅速にインストールをして頂いた。1、2年生の担任数名の確認がまだとれていない。 ○ Fine System については本格的な稼働が、各学年とも7月のデータが返却されて以降になるため、8月以降に活発に活用できるように進めていきたい。 ○ 面談に関する職員研修を研修部と協同で開催できるように進めている。
4 7 月	

検証（１）から、改善のための具体的取組 Action～Do

8
|
11
月

(改善のための具体的取組)

- 研修部と協同して面談に関する職員研修を8月23日に実施した。
講師は養賢ゼミナール 繁泉裕幸 氏。
講演タイトルは 「生徒との面談のあり方」
- インストール状況を再確認した上で、まだの先生には声かけをしてインストール作業を一緒に行い、徹底できるようにしたい。インストール後に通信エラーが発生するケースもあり、その対応を迅速に行いたい。また、システムのメリットを具体的に挙げることで活用方法についても共通理解を図れるようにしたい。

改善のための具体的取組の検証（２）、次年度に向けて Check～Plan

12
|
2
月

・保護者アンケート (12月)

(検証結果)

- 保護者アンケートの内容を見ると、学校の体制や方針について正しく伝わっておらず、誤解を招いている点が散見された。(勉強合宿の代替として東北大オープンキャンパスがある、受験の時期以外は進路指導室に入れない、など) 情報発信の体制も含め検討を進めていきたい。また、土曜活用廃止に関する不安も多く見られた。生徒の自主的な学習体制構築を促していきたい。
国公立大学、特に東北大学に固執しているかのような印象を保護者に与えている点も今後改善が必要であろう。私立大学を志望している生徒に対する指導体制についても改善を進めていきたい。

- 面談に関する研修会については、理論的な面が強く出てしまい実践的な研修を希望している職員との間に乖離があったように思われる。今後、面談に関する職員間の方向性の統一や資料の提供方法等について進路指導部内ばかりではなく、学年部と連携を深めながら協議を進めていきたい。

- 年度の途中でPCの変更があり、旧PCからのFineSystemのライセンスの返却や新しいPCへの新規インストールなどが発生したが、スムーズに切り替えることができる職員と、そうでない職員との差が大きく、いまだ徹底できていない。職員それぞれの時間の確保やリテラシーの向上に課題が残るようだ。そのような中、二年部の学力検討会でFineSystemを活用するなど、利用する場面が増えてきている。来年度もこの傾向を続けて、個々の職員が日常的に活用できるような体制を作っていきたい。

(次年度に向けて)

- 上記にもあるように進路指導部としての情報発信の在り方について今後協議を進めていきたい。ただし、進路通信のような一律の形では各学年の状況に適した話題を提供することは難しいので、その提供媒体を含め考慮が必要であると考えている。
- 次年度も大学入試センター試験の会場になると思われるが、会場設営について進路指導部が指揮を執るのには少し無理があると思われる。生徒及び三年部へのサポートを優先できるように他分掌への移管を考えてもよいのではないかと。
- 3月に秋田県立大学と連携した特別授業を実施する。来年度以降もできる限り高大連携の試みを増やしていきたい。

(外部評価) 3月16日 第2回学校評議員会・学校評価委員会

進路指導部 評価はB

人材育成の根本は追究姿勢の育成であるが、表面的な志望大学の決定に終始する面談からの脱皮を図る必要がある。生徒に寄り添いながら一緒に興味のある方向について検討する面談のあり方やシートの工夫をお願いする。そして、3年間を見通した進路計画と学年部との連携が課題である。従来の学年主導の生徒支援では、学年部スタッフに限定された取組みとなり、個々の生徒に対応しきれない面がある。入学時からの個別指導と、学年部の壁を越えた支援のあり方を早急に組み立てて頂きたい。また、生徒に応じた進路情報の発信も必要である。